

顔

桃割れに結った道子の姿が、上野停車場ステーションの人込みの中に見えたのは、十一時に二十分ばかり前の時であつた。人力車くるまから降りて、入口に併ならんでゐる赤帽の一人に、蹴けこ込みに置いて來た行李を、手荷物にするやうに渡す間にも、始終ぞよぞよと動いてゐる人込みの中を氣にして居た。

二等待合室の中にはひつて、皆に顔を振り向けられて一寸赤くなりながらも、そこにも豫期して居た顔が見えないのを知ると、ほつとしながら、またどうやら物足らなさうにそこを出た。

『どちらまでいらっしゃいます？』と、續いて來た赤帽が言つた。

『白河よ。』

『それぢや十一時五分の下りですな。もう間もなく出ます、切符を買つてまゐりませう。』
『さう、十一時五分なの？』

道子は驚いたやうに言つた。どうしたのだらう、十一時三十分の筈だったので、若様にもさう言つてあるのに。

『十一時三十分ぢやなかつたこと？』

『いゝえ、十一時三十分のは常磐線ですから、白河にいらっしゃるなら十一時五分のでなければいけません。』

『さう、ぢや私の見違ひだったのかしら。』と言ひながら、一寸後向きになつて紙入れから五圓紙幣さつをぬき取り、

『ぢや白河まで一枚買つて頂戴、二等を。』と言つた。

二等で故郷くにまで行くのは初めてなので、なんだか胸が躍るやうであつた。

だけど『都合によつたら僕も赤羽あたりまで一緒に行かう。』といった言葉が頭にあるので、二等にするのが當然のやうにも思へ、なけなしのお錢あしを使つてしまふのも、ちつとも惜しくなかつた。

だけど『間に合ふかしら？』と思ふと心許ない。時間表を見ると確かに青森直行は十一時五分であつた。十一時三十分といふのがその次に並んで居る。どうしてそんな見間違ひをしたものだらう。二十五分の違ひだから、大抵それまでには見えるだらうとは思ふけれど、考へるとだんだん心が落着かなくなつて來る。大丈夫だとも見えるし、また駄目なや

うにも思へる。

今朝自分よりはずっと早く、学校の制服制帽で何気なく家を出た若様のことを思ふと、もうすぐにもそこに、その顔と姿が浮き出るやうな氣がして、道子は思はずひとりで顔を赤らめた。赤帽が剩餘錢つりせんと、青い切符と小手荷物のチッキとを渡して行くと、急にまた不安になり出して、急いで入口のところ立って見た。絶えずせかせかと、人力車や徒歩で集まって来る澤山な人の姿に、一々目を遣つて見るけれど、似よった人はひとりも居ない。遠くの通りまで眺めてみても、ひよつこりと浮き出しさうで居て、それはみんな見も知らぬ人が歩いて居るのであった。

すべての物音がごっちゃになつて、たゞぞよぞよと聞える場内のざわめきが、一刻一刻複雑になつて行く。動きさうもなく思はれるやうな大きな時計の針も、もう十一時に五分ばかり前のところを指して居る。氣早きばやな人達は改札口の前に並んで、大きな澤山な荷物を抱へながら、我慢強く改札の初るのを待つて居る。

この次の下りにのるには、もう二時間近くも待たなければならない。なんだかかうして出て來た以上、一刻も早く乗つてしまひたいやうな、旅馴れない氣分がするし、折角送ってくれる筈の若様に、黙つて發つてしまふのは濟まなくもあるし残り惜しくもある。何故ほんとに、いつになく時間の見違ひなどをしたのだらう。

とうとう改札を知らせる鈴ベルが鳴った。一度に動きだしたやうな足音が、天井の高い場内にいしだたみに整いしだたみに雑音をたてゝ響く。すると、今の今までさまさまに思ひ迷つて居た道子は、ずるずると引かれるやうに改札口の方に急いだ。チキンと切符に缺がはひつた時、もう駄目だといふやうな、最後の失望と一緒に、諦めたやうな、また男に置いてきぼりを喰はせることの、痛い快さであることなどを道子は経験した。

なんとなく緊張した心であつた。窓から半身を乗り出して赤帽を呼ぶ聲や、ぶつかりさうに駆け廻つてはぐれた連れを探す人だの、窓の前に寄り添つて別れを惜しんで居る見送りの人だのを、手持不沙汰に眺め廻しながら、それでもまだ、今にもこゝへ駆けつけて來さうな氣がして、道子は絶えず目を窓の外に配つて居た。幾度か後ればせに驅けて來て、慌てゝ車内に飛び込む人があつた。見送りの人達が窓際から離されると、廣いプラットフォームに暫く動く人の影がなくなる。つひに汽笛が鳴った。さうしてゴトリと汽車は動き出した。

それでもそれでもと思つてた望みが消えると、道子は急に涙ぐましいやうな寂しい氣分になつて、それとともに、波立つて居た心がすっかり靜まつて來るのを覺えた。汽車は走

つて居る。もうどうにもならないと思ふと、却つて落着いて來た。なんだか二等なぞ乗つたのが張合ひ抜けがしたやうである。

道子は明るい色のクッションの隅の方に、足が届かなくなるほど奥深く掛けて、初めて繁々とあたりを見廻した。贅澤な膝掛けを敷いて場所を工合ひよく作つて居る人だの、無造作に腰を掛けて反身になつて新聞を讀んで居る人だの、客はあまり込み合つて居なかつた中に、女といふのは、向ふの隅に場所を取つて居る夫婦者と道子のたつた二人だけであつた。その妻君の痩せぎすな、あまり器量の善くない顔を見て取ると、道子は安心したやうに益々心が落着いて來た。桃割れや、白粉を刷いた顔や、赤っぽい帶やが、一つの色彩となつて、此室内に明るく點じてあるやうにさへ思へた。銘仙や博多位の貧しい着類も、ぱつとした初々しい若さの光りに、澤々しく見えるやうな氣もして満足だつた。

緑色のカーテンが、襪になつて寄せられた窓匡のあたりに、秋の日が斜めにさし込んで居る。目まぐるしくいくつもの線になつて目を掠めて行く土手を、いつまでも眺めて居たので、ふとぐらぐらとして目をつぶつた時、ついと扉を開いてボーイが出て來た。無意識にみんなの顔がそつちに向くとボーイは馴れ切つたやうにつと目を外して、『どちらまでいらっしゃいます？』と道子の前へ體をかづめた。

『白河……』といひさしながら、道子は赤らみかける血を一心に抑へて顔に出すまいとした。

ボーイは次々に小腰をかづめて、時々は凄じく高くなる車輛の響き、客人の口許近く耳を寄せて行先を問うて歩いた。その姿が次の室へと消えて行くと、道子はなんとなくほつとして、鼓動の打つて居る胸を劬はるやうに、體を斜かひにして所在のない目を窓の外にそゝいだ。

ボーイは、列車の給仕などには少し老け過ぎた位の年頃で、年よりは一つ二つ若く見える道子とは同い年か、或は一つほど兄さん位にも見える。恐らく數へ年十九になる自分の方が、一つ二つは上であらうと、道子はわざとさう思ひながら、ふつと最初に行當つた時の目を思ひ出して居た。上野で乗り込んだ時に、客の荷物の世話などを焼いて居たボーイは、道子からもバナナの籠と小さな袋とを取つて、棚の網の上に乗せて呉れた。その時にちらと目が當つた。けれども他に氣の取られて居た道子は、別に氣もつけないで忘れて居たのであつた。恐らくはボーイは何の氣もつかなくつたであらう。

また扉が開いた。ふいっと思はず振向くとまた目が合ふ。ボーイは人々の前を会釋するやうにして通つて出て行つた。

『似てらっしゃる!』

かう思ふと道子の胸は波立つて来る。今時分あの停車場ステーションの人込みの中に、自分を探し求めてゐる一人の男を思ふと、いつにない懐しさがづうつと身内に流れ廻めぐつて、一言も言ひ置かずに發たつて來たことが悔ひられる。わざと時間を違へて欺だましたやうに思はれてはと考へると、居ても立つても居られないやうに不安になつて來て、一刻も早く故郷くにに着いて、今日の始末を書いて送らなければ氣がすまない。それにしても汽車がまどろかしい。また、僅か二時間ばかり待てなかつたのと言れたら何と返事をしやうもないほど譯もなしに發つて來たのだから、自分ながら困つてしまふ。

するとまた道子は、男をさうしてまでも發つて來られる自分の心強さが、頼もしくもあり得意でもあるやうな氣がして、

『私は若様を戀してるのぢやない。若様が私を戀してるのだ。』といふやうな心を抱く。どうしても會ひたいからといって、假病をつかつて、今かうして自分を呼び寄せる田舎の祖母と若様とを較べたなら、どっちが今の私を引つけるだらう? こんなことも道子は考へて見た。しかしそんなことはもう、思ひ惑ふまでもないことだった。祖母は懐しい。けれどもたゞそれだけである。

『私はやっぱり直ぐに歸つて來なければならぬわ。』と道子は自分の心に言つた。

『だけでも私は若様を戀してるのだらうか? 若様が私を戀して下さるから、それで私は若様を懷しんでるのではないだらうか? 私は初め若様をどうも思へやしなかつた。それだのに若様は私を……。』

いろいろと問ひつめてみると、それでもやはり最後には、若様の懐しさが道子の心に残る。それは一體どういふことなんだらう?

『若様のお顔は私はほんとに嫌ひなんだ。ほんとに上品な顔をしてらっしゃるのだけれど、私はちつともそれに引つけられない。』といつてまた、嫌ひだ厭だといふほどそんなに嫌ひでも厭でもないやうである。たゞ私の好きな顔はもつと外にあると、いつもさう思へる。だけど、さういふ顔を持つてゐる男に、まだ一度だつて會つたことがないやうな氣もするのは、今まで讀んだいろいろな小説の中から、好きな男の顔を空想して私はそれを思つてゐるからぢやないだらうか?』

いつか小山に着いたと見える。窓の日が陰かげつたと思ふと、列車は靜かにプラットホームをすれすれに歩いて、やがて止つた。

と、先刻さつきのボーイがはいつて來て、客の辯當や茶を世話焼いてくれる。

『お辯當はいかゞなさいます？』と、道子の前に來て尋ねた。その時道子は思ひ做しなのせいか、ボーイの方でも少し顔を赤めて居るやうな氣がした。

『面影がほんによく似て居る！』と、思へば思ふほどそっくりに見える。若様の魂が、ボーイに乗りうつって、それであの顔があゝもそっくり見えるのではないか知らなどとも思つて見る。

驛々に着くたびに、新しい客がはいつて來たり、下車をする人などがあるので、その都度にボーイは出て來て忠實忠實まめまめしく氣を利かして居た。道子にはそれを見て居ることが、嬉しいやうでもあれば、又妙に寛くつろぎのない氣持にもなるのであつた。

『私の氣の迷ひかも知れない。私の氣の迷ひかも知れない。でなければ、私の眸に煎りつけられた若様のお顔が、たまたまあのボーイの顔に蜃氣楼されたのであるかも知れない。』

道子はなんとなく惱しくなつた。うつらうつらと少し眠りたいやうでもあるけれど、若しもいぎたなく眠りこける姿を、あのボーイにでも見られたらと思ふと、それも厭である。

『しつくりと合つた心持を見出さないで居るうちに、私の心はいつか若様の胸に喰ひ入つて居た。假令私がどんな運命にならうとも、若様は私に取つて忘られない最初の人であつた！』

列車は今那須野あたりを走つて居るらしい。だんだん牧場に近づいて來たと思ひながら、立つて隅の方に寄つて窓から首を出して、意外にも隣室の窓から、そこにあのボーイの首が出て居た。

道子のははつとして目を外そらした。穂ほになつた薄すすきの叢むらの間々に、桔梗や女郎花の秋草が、可憐な色よそほを粧よそほつて咲きほこつて居る。道子は久し振りで懐しい土の匂ひを嗅ぐやうな氣がした。

それにしてもあのボーイは、今まで何に見入つて、何をそこに考へて居たのだらう？ 毎日毎日澤山な客を送り迎へして居る人のことだもの、ほんの行きずりにも等しい自分のことなぞを、なんとでも思ふ筈はないと思つてみながら、面影の床ゆかしさに、自分がかうしてあれこれと少年を思つてみるその心が、若しもや少しは通つて居るのではないかしら、とも道子には思へるのであつた。

お互に手を伸ばしたら、握りも出来るだらうと思はれるほど、その窓とこの窓の間は近かつた。窓匡わくについた兩肘に、うそ寒い夕暮の風が冷たく觸れて行くゆ。正面まともに振り向くことは避けて居るけれど、いつまでも道子の脇目に消えないボーイの顔が、だんだんぼんやりと暮れて行くゆらしい。

も一つ二つの駅で別れて降りなければならぬと思ふと、侘しい心に、若様の顔やらボーイの顔やらが幻影のやうに動き廻つて、不思議に錯綜さくそうした感情が、窓から窓へと流れるやうに少年を包みに行くのを道子は覺えた。

底本…「水野仙子全集」第三卷

初出…「處女」大正二年十月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年六月三十日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)